

カランカラン——

聞き馴染んだ鐘の音と共に店に入ると、にわかになぞりと寒気が走った。

「さ……寒ッ!？」

どういうわけか店内は恐ろしいほど室温が低く、じめりした空気で満たされていた。汗ばんだ肌は一気に冷やされ、思わず震えまで出はじめる。

「おや、いらっしやい」

店の雰囲気はいつもと大分違っているが、店主である霧之助はいつものように、椅子に腰掛けたまま出迎えた。

「なんだか異様に寒くないですか?」

「ああ、寒いなら扉を少し開けたままにしてくれないか」
言われるまま戸を開けると、蒸し暑い外の空気がどろりと店に入り込む。依然中には冷気が頑固に居座るため、暑気と寒気に挟まれた私はなんだかおかしな感じである。気のせいかうっすらと霧まで出ているように見えるのだが。

と、ここでようやく私は違和感の正体に気がついた。

「ひよつとして、幽霊が何かに取憑かれてませんか?」

私の指摘に、霧之助はハッと表情を変え、
「驚いた。魔理沙でも気づくの随分時間がかかったというのに」

自慢出来る話でもないが、私は他の人より一ト際靈感が

強い。稗田家は代々里の非戦闘員であるが、転生のために長らく彼岸に居ることが要因であると思う。

「まあ、バレてしまつては仕方がないね」

霧之助は不敵な笑みを浮かべつつ、窓側の棚に置かれた奇妙な箱を指さした。

真つ白で長細いその箱には、平べたい板を付けた切れ込みのような穴が二筋あり、そこから恐ろしく冷たい空気が湧き出ている。

「なんです、これ?」

「エア・コンディショナーと呼ばれる外の世界の道具で、部屋を冷やしたり暖めたりする能力を持つ。例によつて今まで使い方がさつぱり解らなかつたんだが、先日拾った本によれば、この道具は、箱の中に「霊媒」と呼ばれるものを入れることで動作すると判つたんだ。どんな霊媒を使うのは依然謎のままだったが、霊媒というくらいだから幽霊に關係するものであるのは間違いないだろう」

確かに幽霊はとても冷たいので、居るだけで周囲の気温を下げる効果がある。

「なるほど。この箱の中に幽霊を集めて入れているわけですね。でも、一体どうやつて集めたんですか?」

見たところこの横長な感じが、卒塔婆なんかを入れるのにちょうど良い気もする。ただ、それだけではすぐに飽い